

のかによって、アイヌ語の未来は大きく左右される。」そして地道な努力と時代の流れが作り上げてきた現状を「逆行させることだけはしてはならない」とある。これはアイヌ語の未来に携わる人間にとつての切実な願いでもある。

そしてアイヌ語復興の流れのなかにあって、これからは研究者だからといって、何か特別な立場を約束されるということもあるまい。本書I—6「受け継ごうとする人々のなかへ」には「学者といふ肩書きや、『学問』という言葉の権威で調査ができる時代はすでに終わっているのであり、研究者がその存在価値を社会から不斷に問われる時代にあるのである」とある。もしこの研究者がそれを自覚し、意識改革がなされるとしたら、アイヌの人々との間に今までになく画期的な関係が作られていくのではないか。その実現の一一番近くにいるのが中川氏であろうし、その周辺にいるわれわれは、本書を原点として、自分の存在意義を不斷に問い合わせながらそれぞれの仕事をやっていくことにならう。

本書は、アイヌ文化の入門書であると同時に、それ以外の意味も多く含まれているとい

うことを論じてきた。しかしそれにこだわることで、本書がアイヌ語、アイヌ文化に関わる特定の人間のために書かれたかのような印象を与えてしまったかもしれない。そうではなく、何より本書は誰にとっても気軽に読め

(やすだ・ちか／アイヌ民族博物館)

書評

野村純一著

『日本の世間話』

東京書籍 一九九五

山下欣一

本書は、日本における世間話の研究において、その視点と方法に關して先駆的位置を占めていると評することができよう。

現在、「学校の怪談」類の読み物が児童・生徒向けの絵本、単行本やそのシリーズとして刊行される盛況であり、遂には映画化され

るに至っている。メディアの波にのり、人々の好奇心を満足させ、さらには再生産への土壤を豊かに準備するという現代社会の定形的な過程をとつてはいるのは興味深いものがある。

本書は、このような現状において、多くの研究という立場からの取扱いについては、まだその緒についたばかりであるというのが率直な現状批評であると考えられる。

本書は、このような現状において、多くの問題提起を果敢に試みているのであり、このような意味で先駆的な書であるといえると思う。

本書は、次のような構成をとつていて

はじめに——世間話の世界

(一) 口裂け女一話の行方

(二) 六部殺し一話のカリキユラム

(三) 話の主人公たち一話の実践

(四) 猫、そして狐一話の化身たち
あとがき

評者がもつとも注目するのは「はじめにー世間話の世界」の序章である。

著者は、まず話の世界は、一見華やかでいて、その実、それはいつも不遇であった。その証左として本居宣長が「放しか」と「玉勝間」で指摘しているのを引用する。人はそのつど恰好の話柄を迎えては惜しげもなくこれを手放し、次にまた別の新しい話を取り入れていく。この意味からして「話」を「放し」とするのは妥当な見解であるとする。そして「斬」の一字の成立には、おそらく世間一般のこの種の状況認識が潜在して強く働いていたかと思うとする。

次に、それではいつたい話は何に対しても放しの意であり、かつた容易に手放し得る存在や中身であったのかと発問し、この解答として次のように述べている。それは、そのつど安直に手放せる話と、対極にはすこぶる

執着していっこうに放し難いとするものがある。この両様があつて、話はようやく放してあると位置づけられる。要するに、もともとしつかりくつしていく状態のものを積極的に解いて分け放つから、それぞれが放しなのに解いて分け放つから、それぞれが放しなのである。

そうだとすると、さし当ってはまず、その対極にあつてくついて放れ難い状態の存在を、あらかじめ想定しておくのが必須条件である。これらを具体的な問題に即していえば、放しに対してもくついているのは語り、つまりは物語となる。それはある特定の日、ハレの日に拘束が強く働く、儀礼

の中にあつて丁重にものを語る。身勝手な振舞いは一切許されなかつた。非日常の言語行為で、聖なる當みであつた。これに対し、話を放しとするのは、平常のいわばケの話の生成、成立に関してかつて著者は「世間話から昔話へ」というテーマの設定を試みた。それらは「六部殺し」の話、「こんな晩」を巡る研究がそうである。特定の家を指して、密かにささやかれる噂がいつのまにか増幅して村内の世間話になつて広まる。ついでそれが形式を整えるに至つて、やがて完結、自立した一篇の昔話「こんな晩」に仕上がる

以上のような考え方が話の世界に向けての従来の基本的認識であり評価である。要するに、語りはハレ・聖なる當みで、常に優先、先行して上位にある。他方話は必定負の系譜

にあるとしていたのである。著者は、このよな考え方方に久しい間疑惑を持っていたとしている。話は、面白くて人気があつた。加えて不安定で変節しやすい。その出自、素姓、來歴は判らない場合が多く、これを直接取扱うとすると、手強い相手であつた。また一方、話を一方的にケ・俗なる存在と見なすのも一種の便宜主義のなせる業である。違う考え方があつてもいい。ハレからケ、あるいは聖から俗へといった図式に対し、ケからハレへ、俗から聖へ、もしくは相互互換を考えるといった視点や立場があつても別段不思議はないからうとする。

このようにして、著者は自らの「視点」を明確に示すこととする。このような視点のもとにハレの日の語り、つまりはわが国での昔話の生成、成立に関してかつて著者は「世間話から昔話へ」というテーマの設定を試みた。それらは「六部殺し」の話、「こんな晩」を巡る研究がそうである。特定の家を指して、密かにささやかれる噂がいつのまにか増幅して村内の世間話になつて広まる。ついでそれが形式を整えるに至つて、やがて完結、自立した一篇の昔話「こんな晩」に仕上がる

ていくとみたからである。（野村純一・一九八四）このような意味では「口裂け女」の消長、消息もほぼこれに似た動きがあることが認められよう。いずれにしても、共通して、当初、原点には噂がある。それは一過性のそれではなく、漸次増幅、増殖して「話」、すなわち「放し」から語りへの道筋をたどると考えたからであるとしている。ただここに潜在するメカニズムについてはよく分らない。この仕組みがよく判ったときは、それこそ、一過性の噂と、一方生き残って物語化への装いをこらし得る事例との分別がうまくできるようになるのではないかとの見通しを指摘している。ここにいう噂とは耳から耳へと密かにささやかれる情報の一種を指している。機密的情報である。これらの噂がいったん世間にもれて、尾ひれがついたりして、個々の恣意的な解釈、判断が添加、付置されると、これはもう「話」、要は「放し」としてかつて一人歩き始める。世間に開放、あるいは解放されて、さまざまに取沙汰されるわけである。これらが「世間話」なのであるとしている。

次に著者は、本書における「世間話」のテー

マについて次のように限定して取扱つたこと述べる。それらは芸芸性の付帯されている話型に限るとする。世間話を普話や伝説などに民間説話の一翼を担うものとして位置づけている。しかし、それらのすべてを論議の対象としようとは考えていない。ただしこのとき、そこでの規準を話の構造とか枠組などに求めるのではなく、一つのテーマ、もしくはモチーフのもとにそれがそこに顕在化していると判断した場合、これを俎上にのぼせるのがいいと考えているとしている。この理由として、話は、しばしば時間的、空間的な距離、時間を超えて存在すると理解しているからであると述べている。

次に、このような抽象的にいってもはじまらないとして、事例をあげて説明する。それは青函連絡船に乗っていた母親が三歳の子供を海につき落とす。その三年後、またその母親が三歳の女の子を連れて船に乗る。船が青森に近づくと、その女の子が母親に向かって「押さないでね」と言つたという話がある。さらにもう一事例の話をあげている。

この二事例は、一見、きわめて今日的、かつ現実味を帯び舞台設定のもとに披露されていて、それにもかかわらず、この二事例に通じるマニアについて底するの子供を殺す親と、それに起因する生まれ交わりの報復といった願望で、因果応報、すこぶる仏教的観想の強い話、「こんな親に向かっていう「押さないでね」の一言に尽きる。この言葉がなければ、ここで話はほとんど意味をなさない。従つて、これは「こんな晩」に用いられる「今夜のようだ」とか「おどつあんちょうど今夜のようだ」晚だったね」「こんな顔やつたな」というのと軌を一にしている。このような処理を拒む向には、一拍おいて、とりあえずそれからの借用モチーフであるとすれば、そんなに大きな誤りをしてないはずであるとしている。

ここで注意すべきは、「こんな晩」が装いを改めて、再度ここに登場してきたとする事実なのである。この意味からすると、さきにわが国のかたの話を「不遇」であったと記したが、このようにして「ひとつ話をいつまでも追いかげ」たり、また「格別深くこれにこだわったりする」のも、案外悪くないなと思うとしている。話は思つたよりもしぶとく、しかも思

いかけぬところで再生転機を図つているのが、そこでの実態のようであるからだとしている。

以上、本書の序章にあたる「はじめに一世間話の世界」について、著者の視点と方法をまず知るために、その紹介を試みてみたのである。著者の格調高い文章から、筆者が察知できる本書に示されている視点と方法を要約して示せば、次のようにまとめることができよう。

視点

○語り（物語）—物語（特定の日・儀礼）・

○非日常的言語行為 ハレの非 上位

○話 一日時に制約がない・自由で気隨な言語行為。ケの日 下位

これらの両者は固定した関係でなく、相互に互換するものであるという視点

世間話の概念

「六部殺し」「こんな晩」のように、特定の家を指して、ささやかれる「噂」が増幅し、村内の世間話へ、それが形式を整え、完結、自立した一篇の昔話になる。要するにこの場合「噂」→「世間話」→「昔話」への道筋をたどるとする。「噂」が世間に

もれると、解放されて、さまざまに取沙汰されるのが「世間話」である。

方法

○本書での「世間話」は文芸性の付帯されている話型に限って取扱う。

○話の構造とか枠組に規準を求めず、むしろひとつずつテーマ、もしくはモチーフのもとに、それがそこに顕在化していると判断した場合にこれを取扱う。「話」は時空を超えて存在すると理解しているからだとしている。

(1) 次に「(二)口裂女—話の行方」と題して、世間話の検討を試みている。これらの論文を箇条的に示してみるとしよう。

(2) 『狂言集』から「田辺の別当のくちなわ太刀」——山形県新庄市の「安食円波守」の「大蛇に変る刀」の話、福島県郡山市の「蛇になつた刀」の話をあげ、その類型を合理化された伝説とみる。

(3) 武田正編『砂糖家の昔話』収載の「喰わざ女房」の主人公が「口裂け女」だとしている事例をあげる。ここにあげた『昔話集』が昭和五七年八月、巷間、「口裂け女」が登場してきたのは昭和五四年初夏からである。すると、「口裂け女」は、話者がごく近い時期における受容、享受であったと推測する。

(4) 次に主題とする「口裂け女」について、天野清子氏(仙台市)の報告・説明を引用し、仙台地方の「口裂け女」の話は、その一年前に起つた宮城沖地震の不安と恐怖といつた潜在的に不安定な心理状態を基盤にしつつ、一種の相乗作用を伴つて巷を走つたといふことになるとしている。

(5) 北は北海道から南は沖縄に至るまで広くに取沙汰されながら、それでいてもその生命は短かった。

(6) 次に「口裂け女」について昭和五六年以来、兩三年の間に協力を得た女子学生から直接回答にもとづく、一二〇〇例ほどの資料から、まず五事例をあげ、この話の流布の速

あげ、この「件」についての人々の対応の差と話を対比させて示している。

方法

(3) 武田正編『砂糖家の昔話』収載の「喰わざ女房」の主人公が「口裂け女」だとしている事例をあげる。ここにあげた『昔話集』が昭和五七年八月、巷間、「口裂け女」が登場してきたのは昭和五四年初夏からである。すると、「口裂け女」は、話者がごく近い時期における受容、享受であったと推測する。

(4) 次に主題とする「口裂け女」について、天野清子氏(仙台市)の報告・説明を引用し、仙台地方の「口裂け女」の話は、その一年前に起つた宮城沖地震の不安と恐怖といつた潜在的に不安定な心理状態を基盤にしつつ、一種の相乗作用を伴つて巷を走つたといふことになるとしている。

(5) 北は北海道から南は沖縄に至るまで広くに取沙汰されながら、それでいてもその生命は短かった。

(6) 次に「口裂け女」について昭和五六年以来、兩三年の間に協力を得た女子学生から直接回答にもとづく、一二〇〇例ほどの資料から、まず五事例をあげ、この話の流布の速

度を確認する。

(7) 調査二年目の変化を五事例をあげて次のよう

うにみる。それは「主人公への造型化」が特徴となる。それらは「赤い服に赤いマント」、「レインコートをはおり」、「髪の長い色白の美人」で、いずれも「鎌」を手にしているという設定である。

(8) 次に三年目の調査から四事例をあげて「口

裂け女」が「三人姉妹」で、それらの「末子」であるというふうに内容が定着している点を指摘する。

次にこれらの調査資料群から次のような問題点を要約して示している。

(9) なんの予告もなく「口裂け女」は出現する。
(10) 日本全国を疾風のように流布し、鎮静する。

(11) ここで幾多の「噂話」と命運と同じであると思えた。

(12) しかし、この話は「三人姉妹」の末子に納まり、手に持つ刃物はナイフ、剃刀という日常的な品物から一転して「鎌」になり、「口裂け女」の撃退には「ボマード」を三回唱える。また「べっこう飴」が登場する。そして、次のような要約を試みている。

(13) 要約——「口裂け女」の話は、自らこれらが昔話の「三の構成」を取り入れ、それによつて話はすでに説話化、もしくは物語化への

手順を踏みつつあると認識される。

(14) 具体的には「三人の女人」から「三人姉妹」、つまりは末子が物語のすべての鍵をにぎるという説話の生成、成長を想起できる。

(15) さらには「口裂け女」の話は、その後、「三の構成」を一層補強、構築しつつあるように察知される。そして、ますます昔話への類型化への道をたどるのはないかと予測され、次に、この主題を検討する時は「継母からの仕打ちを受けた末娘」といった筋書きが付加されているかも知れないと付記している。

著者は『狂言集』とその類型化された伝説化された「くちなわの太刀」を検証する。次に「件」という人面牛という短命で予言する話を取り上げる。そして、これらの話の基調に民俗ならびに特別の心意が存在している点を指摘する。そして、山形県の昔話集の

「喰わぬ女房」の話に「口裂け女」が出てくるのが、この昔話集の刊行時と勘案して、「口裂け女」の話からの借用であろうとする。著者のいう「昔話」と「話」との相互交流のかれた「口裂け女その他」の概要である。煩瑣と考えられるほど詳細に紹介したが、著者の視点と方法の具体的展開を検証してみたいという考え方からである。

ここに取扱う「口裂け女」の話は、誠に奇を比較してみると、「口裂け女」の主人公の

体な話であった。それは、当時の小学生などには直接的な影響を与える、「口裂け女」の出現するとされた公園などは子どもたちの下校時には警官、教員の付きそいを必要としたほどであった。それが、また、時を経ずして鎮静化したのも事実なのである。著者がかねてから追求してきた「六部殺し」、「こんな晩

よりも、かなり現代伝説としては主題としては新鮮であるといえよう。

造型化が進展しているのを検証する。それらは「三人姉妹」、「赤いマントを着ている」、「鎌を持っている」となり、さらに「口裂け女」を撃退するには「ボマードと三回唱える」とか「ベッコウ飴」を与えるなどがある。

そして、また「三人姉妹」「三回唱える」とかいう昔話の「三の構成」を補強、強化しつつ成長、生成しているとしている。

さらには「繼母からの仕打ちを受けた末娘」という筋書きへの成長を予測していると結語している。著者は、さらに、その後の「口裂け女」を追跡し、いわばその後の「口裂け女」を具体的な資料から検証しているのが、次におかれた「口裂け女」の生成と展開であり、「口裂け女」の好物が「ベッコウ飴」から「チューチャップス」(なめ尽くすには正味三十分必要、値段三十円)や「ボンタンアメ」になり、「口裂け女」は走るのがとても速い、神出奇没であるとされている。撃退法に手の平に「犬」と書いて見せるなどが話され、さらには、このような話へのマスコミの介入、喧伝とそれらが還流し、また話されるという点、すなわち話の再生産、再整備、もしくは新たな増殖作用といったこ

とがなされるのに注目している。その後の一五〇ほどの事例群から、「口裂け女」の登場から正味四年の歳月の間に、すでに「逃竄譚」への傾斜を濃厚にし、徐々に美人から妖女、妖怪へとイメージを変容し、そこには呪具、呪物、呪言、護符といったものの効用、効果が積極的に説かれるようになっていている。成長がみられる。さらには「三」についてはさらに補強されている点を指摘している。

本論文では巻頭論文につづき、時間的経過における「口裂け女」の話の行方の確認がなされていると評することができる。

次の「もうひとりの『ザシキワラシ』」も興味深い論文で東北地方での伝承を追跡し、その奇異な出現が村の旧家などに特定されながれ、その結果として生じる視界の狭隘さという弊害を予測し、自省もしている点をも指摘していくこととする。(一四六頁～一四七頁)。ここでは、主として本書で取扱われた論考のうち「口裂け女」を題材にした巻頭論文を紹介し、主として、著者の視点と方法について要約して示すこととした。著者は一種の限定と自省を持ちながら、「世間話」に顧著に現われるひとつのテーマ、モチーフを取り上げるという方法で「口裂け女」の生成、もしくは増殖を検証し、それらが昔話の「三」という数字への補強などを確認しようとした試みである。著者の主張に従えば「世間話」とか「噂話」あるいは近頃用いられる「都市伝説」

ついては、注目をあび、すでに二・三の批評も発表されている。これらの批評は、著者の検証した方法を「口裂け女」という現代の轉に説話の創出していく想像力の一端を折出し、口頭伝承の文芸性を問うという可能性を招いたと評される反面、このことによって、現在という問いの文脈からすると、結局、話を既成の「型」に閉じこめる危惧（重信幸彦・一九九四・一一七）、さらには「使い回す言説」を超える必要性（池田香代子・一九九四・二〇一・二二三）が指摘されている。

そこには「場」と「現在」への問い合わせが欠落しているというのである。さらにはここでいう「世間話」に重点を当てて民間伝承論の変革を超える意図を持つ、テキストの解説の系譜へのスタイルに関する口承文芸、心理学、民衆思想史的、社会学・人類学的立場を提示し、特にエドガール・モランの『オルレアンのうわざ』を詳述し、記述の過程においてこそ、社会学的実践は方法的でなくてはならないとしており、また本書において取扱われている「件」の実像をより豊富な木版画の図像で提示し、口頭伝承に文字意識が入りこみ、文字のもつ規定力、拘束力が作用する話

の場においておこなわれたであろうことなどが強調されている。（佐藤健二・一九九五）

ここに紹介した巻頭論文についての二・三の批評などからして、本論考が啓發的、刺激的であることが明確になると考えられる。日本民俗学、口承文芸研究は理論的にはともかく、実践的にはモデル化された日本の伝統的村落との民俗伝承へのアプローチする視点と方法の枠組に自らを開いこんできたのは評者自身を含めての第一の反省となろう。ここで冗言をくり返す必要はないと思うが、日本の口承文芸研究において、ここでいう「世間話」の研究は主要な課題であることは間違いない。「現代のハナンの大海上」（池田香代子・一九九五）において、口承文芸研究の視点と方法を限定しながら、話の成長が文芸性を獲得していく過程を分析して示している本書は、説得力を持つものであり、何回か強調しているように先駆的であるといえよう。さらに、著者が不明としているその成長のメカニズムを明らかにするための追求がなされるこそ、今後残された第一の課題と考えるのである。

参考文献

○野村純一『昔話伝承の研究』 同朋舎出版
一九八四

○常光徹『学校の怪談——口承文芸の展開と諸相』 ミネルヴァ書房 一九九三

○重信幸彦「方法としての「はなし」へ「現在を問うために」」『口承文芸研究』第十一号 日本口承文芸学会 一九九四

○武田正「口承文芸と民俗学——昔話を通して」『日本民俗学』 200号 日本民俗学会 一九九四

○池田香代子「解説 現代伝説を語ることばへ向けて」『ピアスの糸』（池田香代子・大島広志・高津美保子・常光徹・渡辺節子編）白水社 一九九四

○佐藤健二『流言語』 有信堂高文社 一九九五（特に第3章・第4章）
(やました・きんいち／鹿児島経済大学)